

北海道浮魚ニュース

平成26（2014）年度11号

2014年8月1日

道総研 水産研究本部 釧路水産試験場

ホームページ：http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/central/section/shigen/ukiuo/index.html

◎平成26年度北西太平洋サンマ長期漁海況予報発表される

2014年7月31日に水産庁より予報文が発表されましたのでお知らせします。

なお、下記のホームページに、より詳細な予報文が掲載されていますので、ぜひご覧下さい。

水産庁 URL：http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/

【漁況予報】

予報期間：2014年8月～12月

対象海域：北西太平洋（道東海域から三陸海域）

対象漁業：サンマ棒受網

魚体区分：1歳魚の肉体長（≒体長）は6月～7月の漁期前調査時におおむね27cm以上、8月以降の漁期中は28cm以上で、いわゆる大型魚（29cm以上）に相当する。0歳魚はそれより小さく、漁期中のものは中型魚（24cm以上29cm未満）、小型魚（20cm以上24cm未満）およびジャミ（20cm未満）と区別されている。

①来遊量

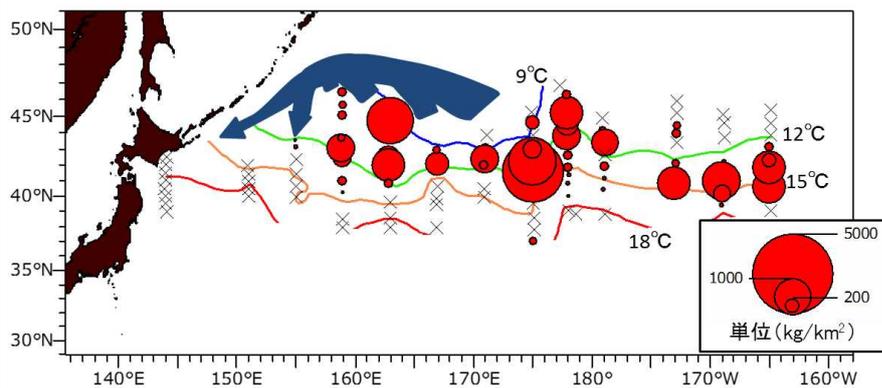
来遊量は前年を上回る。

②魚体

漁期始めから漁期を通して大型魚の割合が高いが、漁期終盤には中小型魚の割合が増加する。漁期全体における大型魚の割合は、前年（60%）を上回る。

③漁期・漁場

大型船出漁直後（8月下旬）の漁況は低調で、漁場は択捉島南東沖～東方海域まで広範囲に分散する。道東海域における漁場は、8月下旬は散発的であるが、9月になると沖合からの魚群が来遊し、漁況は上向く。三陸海域への南下時期は平年並みで、漁場形成は10月上旬となる。



左図は6月～7月に行ったサンマ分布調査の結果。円の大きさは漁獲されたサンマの重量、×は漁獲されなかった調査点を示す。サンマは東経155°以西で少なかった。調査海域の西側で分布量が少ない年は、日本近海への魚群の来遊が遅れる。漁期前に北太平洋沖合域に分布していたサンマは、8月以降の漁期にかけて西方へ回遊する。

《解説》

①来遊量

2014年6月～7月に東経143°～西経165°の海域で、東北区水産研究所が表層トロールによる漁獲調査を行った。その結果、東経143°～西経177°における推定資源重量は191万トンで前年（180万トン）をやや上回った。また、推定資源尾数は171億尾で前年（169億尾）と同程度であった。海域ごとでは、1区（日本沿岸から東経162°）は19万トン、2区（東経162°から西経177°）は172万トンで、2区では前年をやや上回った（2013年：1区21万トン、2区159万トン）。釧路水産試験場

が7月2日～17日に北緯41°00'～46°30'、東経150°30'～162°30'で実施した流し網調査では、漁獲尾数は1,531尾であり前年(851尾)を上回った。CPUE(流し網1反あたりの漁獲尾数)は21.2尾であり、前年(6.2尾)を上回った。開発調査センターが、5月1日から行ったサンマ棒受網による公海サンマ漁場開発調査では、7月22日現在の操業船1隻・操業1日(探索日を除く)あたり漁獲量は約22.7トン(暫定集計値:前年と同期間で集計)と前年の17.1トンを上回った。漁獲した海域は東経153°～172°で、漁獲が多い海域は前年より西寄りとなり、東経150°台での漁獲が増加した。

漁期前の各調査結果をまとめると、東北区水産研究所の調査結果から得られた推定資源重量および推定資源尾数は前年並みからやや上回る程度だが、釧路水産試験場及び開発調査センターの調査では前年を上回る漁獲が見られた。従って、本年の日本近海への来遊量は前年を上回ると判断した。ただし、東経155°以西では分布量が少ないため、魚群の日本近海への来遊が遅れ、漁期始めの漁況は低調に推移する。その後、東経155°以東の魚群が日本近海に来遊するのに伴い漁況は上向くと予測され、遅くとも9月中旬には日本近海漁場への来遊量は増加すると考えられる。

②魚体

東北区水産研究所による2014年の漁期前調査において、日本近海から西経177°までの1歳魚(27cm以上)の推定資源尾数の割合は79%で、前年(83%)と同程度であった。調査で採集されたサンマの体長組成を経度10°間隔で集計すると、東経150°～170°では1歳魚の割合は非常に高く(89～97%)、東経170°以東でも74%と高かった。これに対し西経域では1歳魚の割合は低かった(17%)。釧路水産試験場による流し網調査でも、調査海域全体での27cm以上の個体の割合は高かった(96%)。また、開発調査センターのサンマ棒受網による調査でも、27cm以上の割合が高かった。

いずれの調査でも東経域では27cm以上の割合が高かった。漁期には調査時に西側に分布していた魚群から順次日本近海の漁場に達すると考えられる。従って、経度10°間隔の体長組成から判断して、本年は漁期を通して大型魚の割合が高く、漁期終盤には中小型魚の割合が増加すると予測される。前年は漁期前に東経150°～160°海域で中小型魚(0歳魚)が分布していたが、本年は東経域全体で0歳魚の割合は低く、1歳魚の割合が高いことから、漁期全体での大型魚の割合は前年(60%)を上回ると判断される。

③漁期・漁場

過去5年間の8月下旬(100トン以上のサンマ棒受網船解禁直後)の漁場平均表面水温は15℃前後であった。7月下旬現在、釧路沖から択捉島南東沿岸域には15℃以下の表面水温帯が分布するが、例年8月下旬にかけて表面水温はさらに上昇する。本年の道東海域の表面水温は、7月下旬現在は平年より高めで、気象庁発表の海面水温・海流1か月予報(7月19日から8月20日まで)によると、8月20日頃の道東海域の表面水温は平年よりやや高めで、表面水温15℃の等温線は択捉島南部から東方沖に広がると予測されている。近年、8月下旬～9月上旬の道東海域では水温が高い傾向がある。また、2010年以降、東経155°以西海域のサンマの分布密度は低い傾向にあり、日本近海への魚群の来遊は遅れて、8月下旬の漁場は分散している。従って、本年の100トン以上のサンマ棒受網船解禁(8月20日)後の漁場は、道東海域からは遠く、択捉島南東沖から東方海域に分散して形成される。

【海況予報】

《今後の見通し(2014年8月～9月)》 (注) FRA-ROMSシステムによる結果

- ①近海の黒潮の北限位置はかなり北偏(北緯36°20'～37°)で推移する。
- ②近海の黒潮系暖水の北限位置は平年並み～やや北偏(北緯38°10'～39°30')で推移する。
- ③襟裳岬南東沖、三陸はるか沖および金華山沖の暖水塊は停滞する。
- ④親潮第1分枝の南限はやや北偏～かなり北偏(北緯40°30'～41°50')で推移し、三陸近海に冷水域が形成される。
- ⑤親潮第2分枝の南限はかなり北偏(北緯40°20'～41°30')で推移する。
- ⑥津軽暖流の下北半島東方への張り出しは平年並み～やや強勢(東経142°50'～143°20')で推移する。

なお、海況の今後の見通しについては、下記のホームページを参照下さい。

東北区水産研究所(東北海区海況予報) <http://tnfri.fra.affrc.go.jp/kaiyo/kaiyoubu/predict/index-j.html>

(釧路水産試験場調査研究部、TEL: 0154-23-6222、FAX: 0154-23-6225)